

4. 記念式典スピーチ

東京オフィスの開設にあたって

ASBJ 委員長 にしかわ いくお
西川 郁生



1 はじめに

皆様、こんにちは。

企業会計基準委員会（ASBJ）委員長の西川郁生です。本日、皆様にご挨拶申し上げることができ非常に光栄です。IFRS 財団と財務会計基準機構（FASB）には、この素晴らしいイベントを主催していただき、御礼申し上げます。

まず最初に、このセレモニーの司会者であり、東京オフィスの初代ディレクターとなられる竹村光広さんに、お祝いを申し上げたいと思います。すでにご存知かもしれませんが、竹村さんは以前に国際会計基準審議会（IASB）のスタッフ・メンバーとして勤務されていました。その前は、ASBJ に勤務されていて私たちの仲間でした。竹村さん、東京にお帰りなさい。そして ASBJ 陸上部にお帰りなさい（笑）。

一緒に仕事をしていた間に、竹村さんは、技術的な仕事だけでなく、強固な人間関係の構築についても才能を示されていました。両方とも、オフィス・ディレクターとしての新たな役割において貴重なスキルとなるものです。このオフィスの成功に竹村さんが大いに貢献されるものと確信しています。

本日は、国際財務報告基準（IFRS）に関する現在の日本の立場と、アジア・オセアニアオフィスの役割について考えていることとお話ししたいと思います。しかし、まず、私自身に

ついて、また、国際的な会計基準設定活動における私のバックグラウンドについて、少しお話ししたいと思います。

2 国際的基準設定への私の関与

私が国際的基準設定活動に関わるようになったのは、41歳のときで私はこの分野では新顔なのです（笑）。実のところおよそ20年前になりますが、会計事務所での監査人をしていて、日本公認会計士協会（JICPA）の理事に選任されました。

まもなく、JICPA から国際会計基準委員会（IASC）の理事会の日本代表として送り出されました。IASC での会議デビューは1993年3月でした。今は亡き白鳥栄一さんが東京での理事会で最初に議長を務められた時です。これは非常に素晴らしい経験でした。海外での会議への初参加は、その年の6月のロンドンでの会議でした。その公式夕食会で IASB の創立者である今は亡き Benson 卿をお見受けしました。

Benson 卿をお見受けしたのは、これが初めて最後で、この機会を持てたことを非常に感謝しています。

その後、「比較可能性改善プロジェクト」の最終段階と、「コア・スタンダードプロジェクト」に1998年まで関わりました。

IASC での仕事は非常に興味深いものでした

が、私にとって非常に大変な時期でもありました。事務所では監査人、JICPA では理事、そして IASC の代表という 3 つの役割を同時にしていたからです。今でも、忙しかった当時の悪い夢を見ることがあります。

2001 年に IASB が IASC を引き継いで発足しました。

その当時は、IASB が東京に事務所を置くようになるとは夢にも思いませんでした。私たちは現在、当時とは非常に違った世界に生きており、その一端にいることを光榮に思います。

3 現状について

現在、私たちは、会計基準の国際的なコンバージェンスへ向けて大きな進展が達成されてきた世界に生きています。日本の会計基準は、コンバージェンス・プロジェクトを通じて大幅な変更を経験してきました。これにより、日本の会計基準は IFRS と比較可能なものになっています。

さらに、IFRS の任意適用を認めるという金融庁の決定により、日本のいくつかの多国籍企業が財務報告書の作成に IFRS を使用しています。こうした企業数は増加しており、IFRS に対する日本の関心は高くなっています。

しかし、同時に、この国際化の拡大により、会計基準設定への課題が引き続き生じています。これが引き金となって、IFRS 財団と IASB が、IASB と各国及び各地域の基準設定主体との間の関係やコミュニケーションの構造の性質を再検討することとなりました。すでにご承知かもしれませんが、IASB は、会計基準アドバイザー・フォーラムの設置を計画しています。このフォーラムの運営方法や機能についての詳細は、まだ確定していません。しかし、私が申し上げられることとしては、ASBJ

は、このフォーラムの成功のために一生懸命に取り組み、高品質な国際的な会計基準の開発に貢献することをお約束します。これは常に私たちが目的としてきたところ です。私たちは、IASB の基準設定プロセスを初期の段階で支援するために、ASBJ の調査研究の機能を拡充することも考えています。

4 アジア・オセアニアオフィスから私が期待するもの

IASB と各地域の基準設定主体との間のこうした関係の重要な一部となるのが、アジア・オセアニアオフィスの設置であり、本日私たちはこれを祝っているわけです。東京オフィスは「当地域の IFRS センター」となることが期待されています。竹村さんや他の方々がこの目的の達成のために懸命に働いておられることを私は知っています。その検討のために私の考えをお伝えしておきたいと思います。

第一に、東京オフィスは、アジア・オセアニア地域のアウトリーチ活動の本拠として機能するのに好適な場所にあります。利害関係者は、さらに「証拠に基づいた」基準設定を求めてお



り、調査研究や適用後レビューが基準設定活動の非常に重要な一部となっています。この東京オフィスは、こうした調査研究や協議の開催および調整のための拠点として重要な役割を果たすことができます。

第二に、東京オフィスは、アジェンダ・ペーパーや他の重要な文書の作成にあたって、ロンドンのオフィスの技術的活動への支援ができます。アジア・オセアニア地域には特有のテーマや論点が存在しています。例えば、農業です。東京オフィスは、当地域やその産業に影響を与えるこうした特有の論点のいくつかを解決する上で、この地域の基準設定主体に対して一元化した支援を提供することができます。

第三に、この東京オフィスは、アジア・オセアニア地域での IFRS の適用活動を支援するための優れた拠点を提供できます。当地域の各法域がすでに IFRS の適用を始めている中で、さまざまな適用上の課題に直面していて、その中には予想されていたものも予想外のものもあります。東京オフィスは、ロンドンのオフィスと協力して、これらの問題の対応と解決を支援する中心点としての役割を果たすことができま

す。

アジア・オセアニア地域での私の仲間と基準設定主体は、東京オフィスの運営および業務について進んで支援と関与をしていく意向であると伺っています。もちろん、ASBJ は喜んで、できる限りの方法でこのオフィスを支援いたします。両オフィスは大変近い距離にあり、私ども双方にとって大変都合がよくなっています。地下鉄でもすぐですし、ハンス・フーガーホーストさんなら自転車であつという間の距離です(笑)。

改めましてアジア・オセアニア地域での IFRS の進展における重要な日となる本日、IASB と IFRS 財団にお祝いを申し上げますと思います。今後も末長く皆様と緊密に協力して仕事ができることを楽しみにしています。

ご清聴ありがとうございました。

※この原稿は、11月15日に開催された IFRS 財団アジア・オセアニアオフィス開所記念式典での講演を英語から日本語へ翻訳したものです。